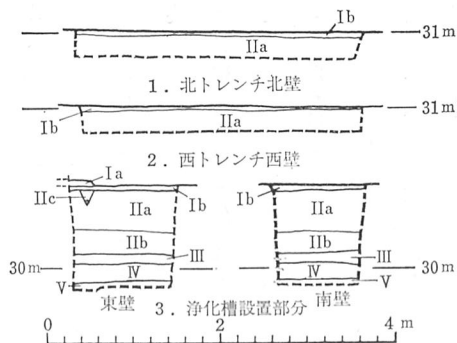
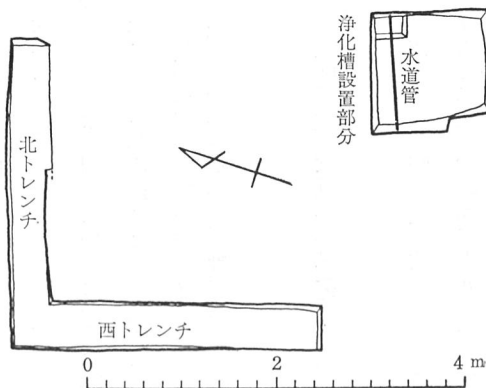




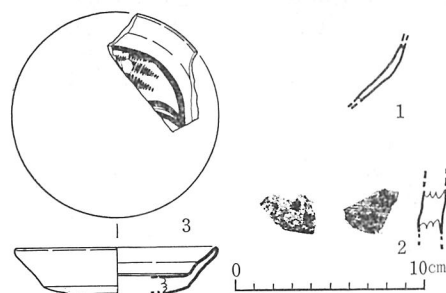
第16図 三島藍野陵トレンチ断面



第15図 三島藍野陵トレンチ平面 (1/80)

ル掘り下げた(第14図)。その結果、前者は全て近年の盛土であることが判明した。後者は、前者で検出された盛土(II層)が約七〇センチにわたって認められ、その下位は、水田関係に利用されたと思われる青灰色粘土層(III層)であった。III層の下位には湧水の認められる明灰褐色粘質土(IV層)を挟み、多くの礫や風化礫を含んだ硬い粘質土(V層)がある。これは地山かと思われる。III層からは畦畔と思われるものは検出されていない(第15・16図)。工事は予定通り施工した。

出土した遺物は、土師



第17図 三島藍野陵の出土品 (1/4)

器二片、埴輪二片、磁器一片の計五片である(第17図)。

土師器(1) 二片ともに薄手の小片である。1は一応、埴輪として復元した。外面には指オサエ痕らしきものをとどめており、内面は横撫でによる仕上げである。他の一片もおそらく埴輪であろう。

埴輪円筒(2) いずれも胴部の小片で、磨耗が著しい。2の外面は横刷毛目による調整であり、赤

色塗彩がなされている。

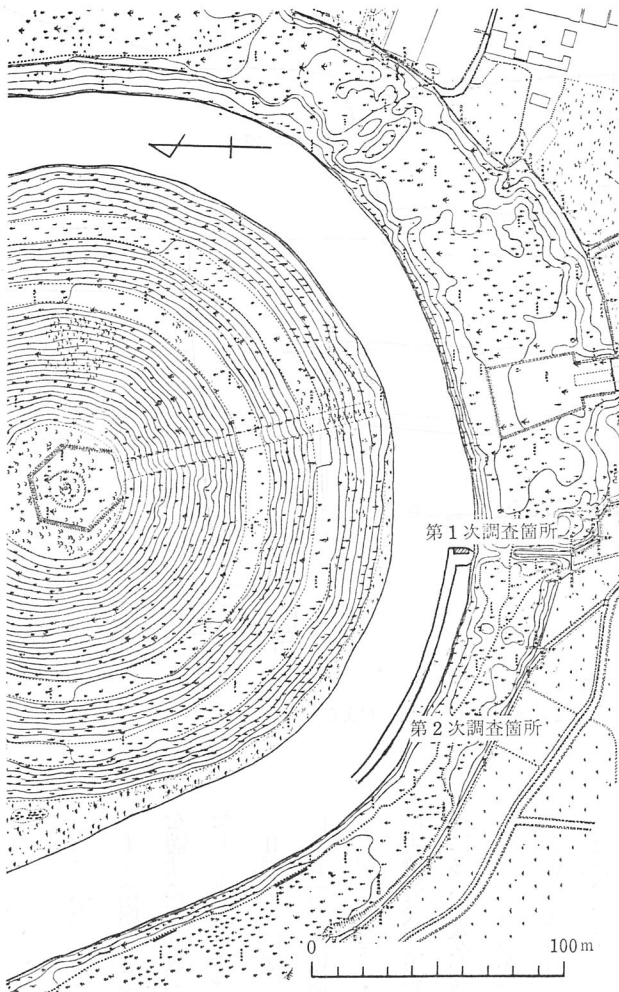
磁器(3) 中国華南産の青磁皿である。体部中位で屈曲し、あげ底状を呈する製品であろう。見込みには、ジグザグ状の点綴文を地文様とする画花文が認められる。底部は僅かにとどめているにすぎないが、施釉されていないようである。

(福尾正彦)

恵我藻伏岡陵濠内緊急浚渫工事箇所調査

応神天皇恵我藻伏岡陵の後円部側周濠が経年のヘドロ堆積によって埋

もれたため、入水口からの取水に支障をきたすようになった。このため、ヘドロ堆積の少い西側周濠まで約一〇〇メートルにわたって通水溝を設ける必要が生じた。そこで、昭和五十九年十二月十日から十五日までに、入水口の一部についてヘドロ除去の実施とこれに伴う立会調査（第一次調査）を行い、堆積状況を観察して通水溝掘削の参考資料を得た。この結果、翌昭和六十年三月七日から四月九日までの通水溝の設定にあたっては、第一次調査において確認された原初の周濠内堆積層を損わないように留意した。もちろん、この通水溝の掘削に際しても立会調査（第



第18図 恵我藻伏岡陵調査箇所の位置 (1/3000)

二次調査）を実施している（第18図）。

以下、昭和五十九年に実施した第一次調査を中心に、二次にわたる立会調査の結果を報告する。

第一次調査を実施したのは入水管の東隣りで、外堤裾から周濠中央に向かって幅二メートル、長さ六・五メートルの部分である。

以下の基本的層序を認めることができた（第19図 図版七1）。

I層 黒灰色砂質土層。調査区の南半、外堤側のみに認められ、II層およびIV層の上部を掘り込んだ跡に堆積している。塵芥を多く混入したいわゆるヘドロ層である。

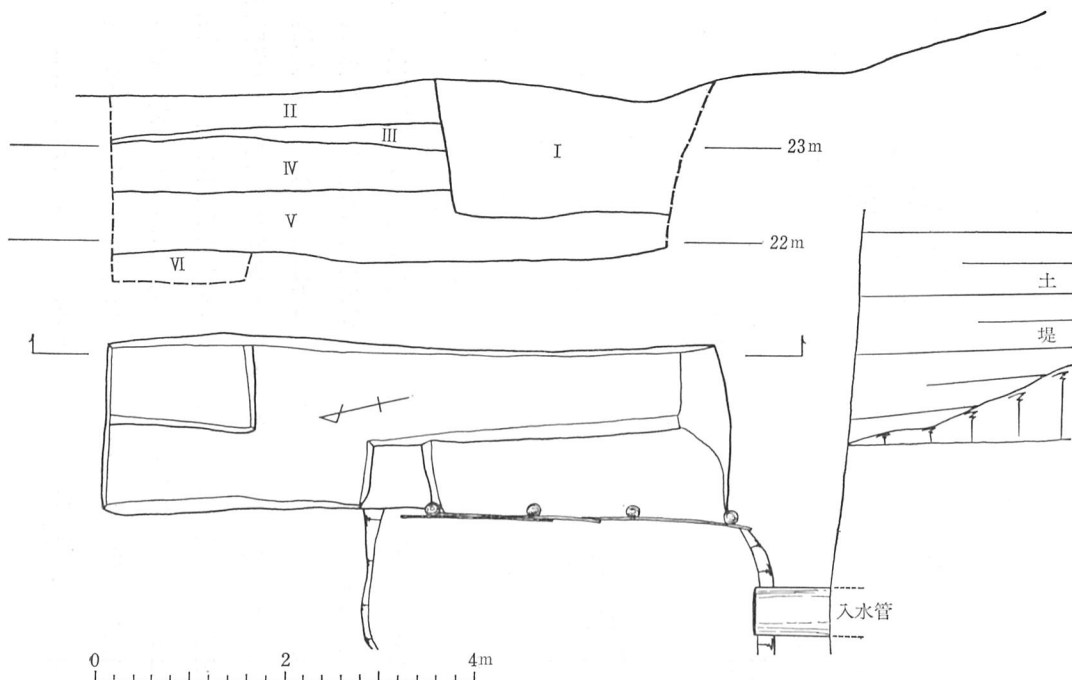
II層 淡茶褐色砂質土層。

III層 青白色粘土層。堆積は薄く、II層とIV層の中間層ともいえるべきものである。

IV層 灰茶褐色粘質土層。

V層 茶褐色腐植土層。本層の最上部から後世の土師器・磁器・瓦器・瓦若干が出土した以外は、古墳時代の遺物（埴輪・土師器）のみを包含する。本層には木片等、植物遺体が多く含まれている。

VI層 青灰色粘質砂層。有機質などの混り気のない硬くしまった単一の層で、遺物は含まない。北端部（周濠中央寄）を約三〇センチ掘り込ん



第19図 恵我藻伏岡陵第1次調査箇所 の平面および断面 (1/80)

だ所、下方になる程ますます硬くなることがわかった。
次に以上をまとめておこう。

I層は塵芥を多く含む最近の堆積層であるが、上述のように外堤裾部を溝状に削り取った跡に堆積したものである。仮の入水溝として掘削したものであらう。

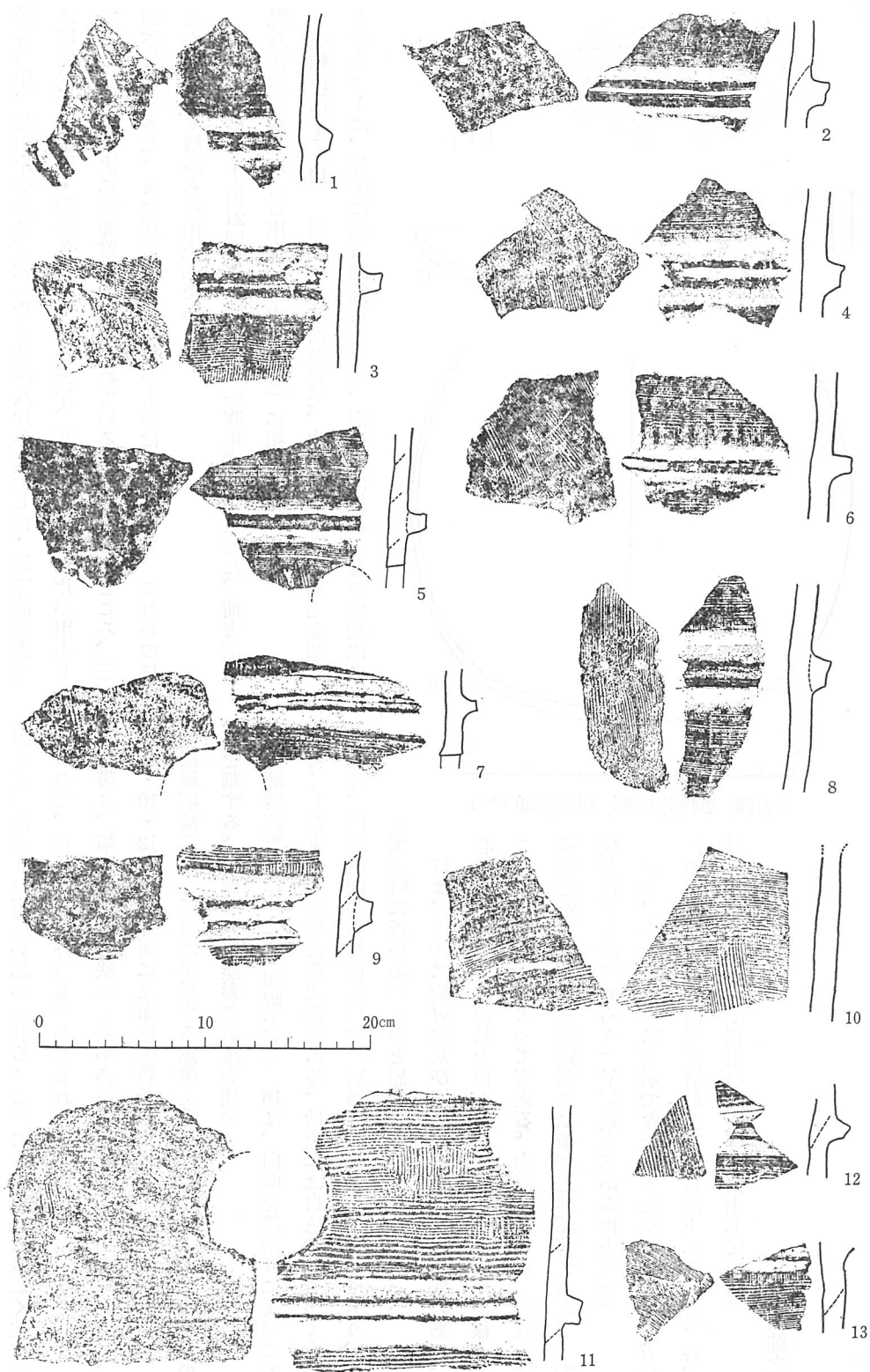
II層からIV層は水平に堆積しており、各層の状況も均質で攪乱された様子もなく、短期間に堆積したものではなからう。

V層は厚さ〇・六〇・八メートルあって、上述のように最上部以外は古墳時代の遺物のみを包含する。歴史時代の遺物の直下には木片等の特に多い部分があり、古墳時代の遺物はこの下方から出土した。この下のVI層は遺物がなく、混り気のない極めて硬い砂層である。これらのことからV層は原初の周濠内堆積で、VI層の上面が原初の濠底と考えられる。

なお、調査区の南端部ではVI層がやや立ち上がるかのような状況を呈しているが、これが外堤の裾部であるのか否かについては確認できなかった。

以上の結果、翌春に実施した通水溝の掘削にあたってはV層以下を保存することとし、掘削がこの層に及ばないように留意した。従って、第二次調査においては特に記述すべき程の事実は見い出せなかった。ただ、入水口部（第一次調査地点の西隣り）の南端で、V層の上部が現われたにすぎない。

出土遺物は、第一次調査では埴輪・土師器各一九片、瓦器・陶器・磁

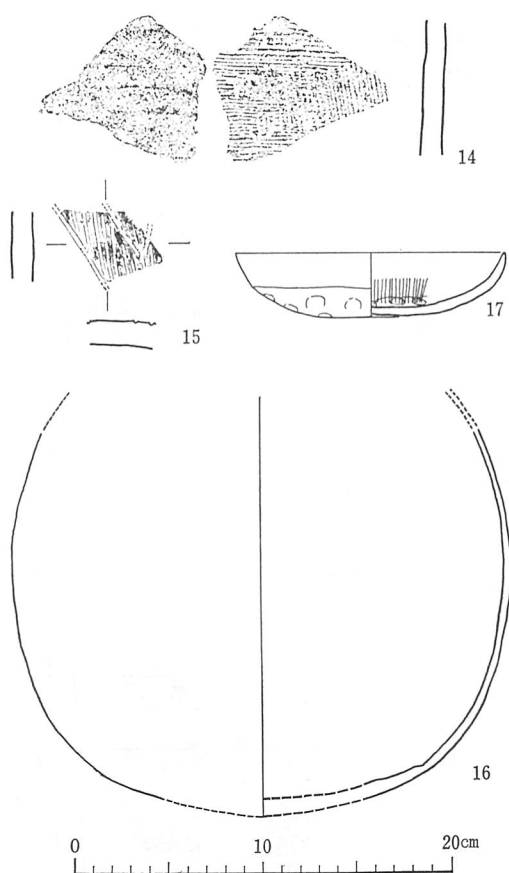


第20図 恵我藻伏岡陵の出土品(1) (1/4)

器各一片、瓦六片の外に下駄一片の計四八片が出土した。第二次調査では埴輪五片、炆器・陶器各一片、磁器三片、瓦四片の計一四片が出土している。埴輪の次に土師器が多数を占めているが、接合したところ、三個体分になった。また瓦の中に、布目のものはみられない。これらのほとんどは、V層からの出土品である。

埴輪(第20図1~第21図15 図版八) 一昨年度に実施した、前方部内堤外法面の調査による出土品(本誌35号)に類似している。

埴輪円筒(1~14) 調整は、外面が刷毛、内面は撫で及び刷毛を基本とする。1は、外面に撫で調整を多用し、内面には板状のもので縦位に



第21図 恵我藻伏岡陵の出土品(2) (1/4)

削り取ったような痕跡が認められる。このように他とは著しく技法が異なるので、普通円筒以外のものかもしれない。

突帯は、幅広のものと狭いものがあるが、台形を呈するものが多い。

2・10・12・14の外面には赤色塗彩が認められる。

楕形埴輪(15) 二重に平行する鋸歯文を描き、その中間には多数の直線を刻する。表面に赤色塗彩の痕跡を残す。

土師器(第21図16・17 図版七二) 16は、内面を篋削りによって器壁

を薄くした丸底壺の胴及び底部である。胎土には白色砂粒を多く含む。

色調は、内外両面共赤褐色を呈す。VI層の直上から出土しており、当陵

築造時に近い頃のものと思われる。

17は、内面に放射状及び螺旋状の暗文を施す皿である。中心に径約三センチの粘土板をおいて巻き上げ成形の核としたことが外面観察によって窺える。内面及び外面の口縁部には横撫でを施す外、外面底部には指押えが顕著である。平安時代前期のものであろう。V層最上部から出土した。

なお、小片のために図示できなかったが、幕末の伊万里磁器や室町時代の瓦器がV層最上部から出土した。この外、上層からは、棟込瓦や幕末の陶器等が出土している。

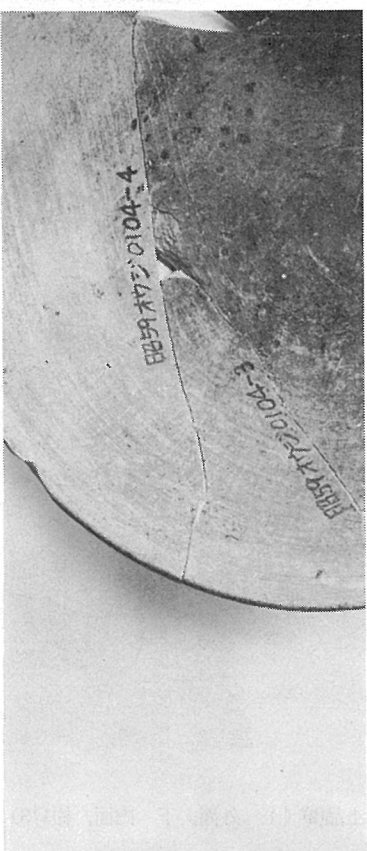
(土生田純之)



1 第1次調査箇所の東壁（南から）



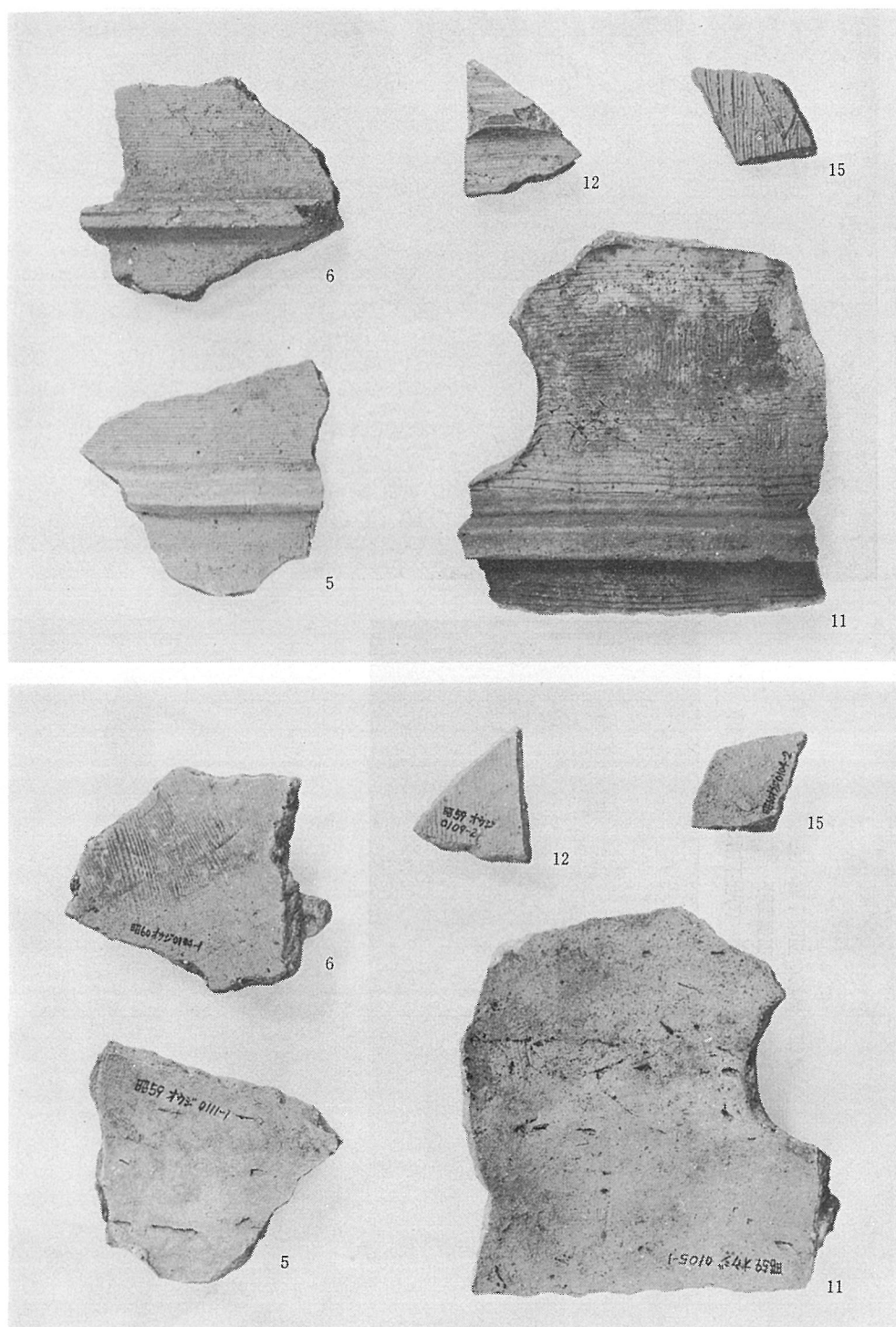
17



2 恵我藻伏岡陵の出土品(1)

上 土師器皿

下 同上内面の放射状暗文



恵我藻伏岡陵の出土品(2) (上 外面, 下 内面, 約1/3)